

評論家にはなりたくない

坂田三允（群馬県立精神医療センター看護部長）

9月に起こった米国同時多発テロ事件以来、テレビにアフガニスタンが登場しない日はない。しかし、アフガニスタンは私にとって遠い国だ。アフガニスタンだけではない。いわゆる第3世界と呼ばれる国々のことは、本書にいう通り「我われ日本人にとって、もっともなじみのうすい世界のひとつである。西域とシルクロード、石油問題、ガンダーラ文化、アラビアン・ナイト、イスラム革命、湾岸戦争などがごちゃごちゃになっていて、なかなか理解しがたい」のである。理解しがたいままに放置していても、私の日常生活はおそらくほとんど影響を受けないのだ。

しかし、今回は、世界中の人々を敵にまわすとしか思えないのに、なぜ世界貿易センタービルをターゲットにしたのだらうという素朴な疑問から、少しでもこの世界に起こっていることをわかつて、『文明の衝突と21世紀の日本』『文明の対話』などという本を読んだ。イスラム教のことを知ろうとして、『イスラム思想史』などという専門書にも手を出した。これらの書物は私の知らなかったことをたくさん教えてくれた。

だが、これらの書物を読むことによって私に何がわかったといえるのだらう。本書に出会ってそう思う。発売されたのは1993年のなのだから、内容にはもっとたくさんのことが追加されるのかもしれない。けれども著者がいたかったことの本質は変わらないのではないか。「私は一介の臨床医で、もの書きでも学者でもあり

ません。（中略）新聞などでは伝わらぬ底辺の人びとの実情の一端を紹介することができるだけです」という著者は、現地の「大部分の人びとの声なき声を代弁」して語る。「ジュネーブのデスクで、東京やロンドンの新聞社で、ベシャワールのサロンで、多くの者がアフガニスタンとその情勢を語り、天下国家を論評しては立ち消えていった。（中略）ラジオや新聞は連日『アフガニスタンの安定』をかかげる政治的動きを伝えながら、この13年間何ひとつおきなかった。おしよせた国際救援活動も、どれだけ有効に機能したのか。興味本位とまではいわないが、己れの方針であらしまわり、困難に出会えばさっさとひきあげる」と。安易に「知識」を手に入れてわかったような気になっていた私には、アフガニスタンの人々の「声なき声」は届いていなかった。

おそらく、著者がいうように「真剣に考えればぞっとするような問題でさえ、『21世紀に向けて』だの、『グローバル』だの、『地球にやさしい』だのという流行語で、うわべをよそおって安心しているのが日本の現状」なのだ。『「進歩」の名の下に、無用な知識で自分を退化させてきた生を「人の生死の意味をおきざりに、その定義の議論に熱中する社会」で生きている私ではあるのだが、私はこれからもこの場で、目の前に生じる出来事に精一杯取り組んでいく。なぜなら、ここが私に与えられた場であり、それが私の生活だからだ。ただ、安直な評論家にだけはなりたくないと思う。



さかた・みよし

2001年の4月から群馬県立精神医療センターにて看護部長の任を仰せつかることに。通勤に時間がかかるようになって、電車を書斎がわりに本をたくさん読もうと思っていたのに、ついつい、ZZZZ・・・。寝室がわりになってしまっている。大きな計算違いだったわー。

●群馬県立精神医療センター：〒379-2221 群馬県佐波郡東村大字国定 2374